校友時報

昭和49年3月1日
編集人兼発行所
秋田県能代市追分町4番26号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　大勝堂印刷所

部説

学校内橋渡しの往信

我々新聞部は、全力を尽して校友時報を作り、生徒全員に呼び掛けている。つまり、紙面を通して学校生活に触れ合いの機会を与えているのである。しかし、この新聞部の願いに反し、この校友時報は、どうやら新聞部だけのものになりつつあるようだ。

年に五回の定期的発行は、割り付けをマンネリ化させ、記事の内容までも取り上げ方が固定化してくる。大きく分けてみると、一面には生徒会の活動状況、三面は体育大会などのスポーツ関係を主にし、二、四面には問題提起という具合になっている。そのように一面には生徒会活動を、二面には日本列島を載せたりするのは、今までの割り付けが適切に思え、また会員のものであり、我々新聞部は、その橋渡しを任務と心得ている。それを打破するだけの見事な割り付けが考えられなかったからである。そうなると、一般商業新聞と何ら変わりなく、ただそれを縮小したものに感じられる。

学校新聞の根本的目的は、いかに生徒全員の意見を反映させるか、能代高校に今、必要とされる問題は何か、何を考えてもらいたいのか、という事なのである。生徒の意見、主張を聞くために投書箱も設けている。問題提起をし、呼び掛けているが一向に生徒の反応がない。この学校新聞は生徒全員のものであり、我々新聞部は、その橋渡しを任務と心得ている。投書箱は、ぜひ活用してもらいたい。生徒からの問題提起があれば早速それを取り扱い、紙面に載せ全校生徒に呼び掛けましょう。我々新聞作製上の本懐はそこにある と言いたい。

学校新聞の影響は非常に大きいものである。生徒会下における報道機関であるので限定された立場の主張をともすれば孤立してしまう虞れもある。

部では、一学期に昨年度を回顧し、心機一転を心がけ、様々な年間計画を立てるのであるが、学年末には新鮮さを失いがちである。毎年、同じような目標を立てるのだが、なかなかそれを達成できぬうちに年を越してしまう傾向にある。そのことにおいて、技術向上のために郵送されてくる他校新聞を吟味し、力不足を感ず努力は止むことなく続けてきている。

また、今年度発足されたばかりの能代山本新聞研究会をより強んにし、学校新聞の作製技術の向上を計り、よりすぐれた「校友時報」にしたいと念じている。

今年度も、あと残り少なくなった。政治・経済方面を始め、学校生活を取り巻く社会情勢も、激動の一年であったといえる。

そこでこの一年間の回顧を、生徒会長に尋ねてみた。「クラブ活動では、テニス・バレー部等の好成績、また文化局でも、美術部の美術展入選など眼を見張るものがあった。来年への期待が大きい。

しかし、予算面では、物価高のあおりを受けて、生徒会費を値上げしたにもかかわらず、補正予算を組まざるを得なくなった。」と語ってくれた。運動クラブでは、好成績を納めた部を含めて、低迷状態から序々に脱皮しつつあるようだ。

ところで、この季節になると、毎年のように生徒から決算報告についての疑問が訴えられる。それは、「部員も少なく活動できる状態でないのに予算を配分して、決算で『支出ゼロ』となっているのは、不合理だ」という声だ。今年度も、化学クラブ等は、実質的な活動をしなく、予算を全く使用しない。

一方では、この物価上昇で活動に支障をきたしているクラブもあるのだ。このようなアンバランス状態を解消するために、予算案作成上一層の配慮が必要であろう。

ところで、生徒会長は最後に、「生徒にもっと積極的に参加してほしい。」と言った。しかし、会長の発言は、上層的な上辺をなでたにすぎない主旨のものばかりだ。例えば『…積極的な参加…』と言っていながら、会長自身は何ら積極的な活動をしていないのではないだろうか。（生徒会に疑問のある方は、生徒会室へとか、前にこの紙上でも取り上げた生徒委員会と学級の問題である。この二つを一つ上げたところで、解消されているものは一つとしてない。ということを根拠として）このことが、生徒会に対する魅力の低下にもつながっているのではないだろうか。「生徒会をつぶしたらどうなる」と問われは、執行部は、「部への予算が配給できなくなる。」というが、生徒会は、予算配給マシーンではないのだ。

本校舎最後の卒業式

深い雪に根や幹を埋めながらも自然は敏感に春を感じ、新芽をふき出している。その躍動する春の中で、本校では三月一日に第二千六期生の卒業式が挙行される。

卒業予定者三百二十八名（女子十九名）のうち、式に出席する人は、一百五十名ぐらいである。大学入試のために、式に顔の顔が一堂に会しないのは残念であるが、すでに自分の道を歩み出しているということであろう。

本年はまれにみる大雪で、古いこの校舎も銀世界の中にうずもれてしまった。また今年の卒業式はこの校舎で行われる最後の式でもあるので、感激もひとしおであろうと思われる。三年間、この校舎で勉強・部活動とはげんできた卒業生にとっては、想い出深いことがたくさんよみがえってくるだろう。苦しくも楽しくもある十里験歩、みんなで力を合わせた文化祭・体育大会。そして友との語り合いや部活動で新しい目を開いていったにちがいない。

高校生時代とは自分の人生にとって、どんな役目を果しただろう。R・スチブンソンは、「青春は何もかも実験である。」ということばを残している。

想えば入学当時にもっていた夢や希望も大きく変わって、新たな抱負や理想をいだいて、それぞれの道へと進んでいくのだろう。今まで前ばかりを見つめてきた人も今、この時、自分の後をふり返り自分の足あとが、まっすぐに続いているかどうか確かめてみたらどうだろう。その道は、曲がりくねっているかもしれないし、途中でとぎれているかもしれない。しかし、今、また新たな一歩を踏み出していかなければならない。ゆっくりな一歩であってもよいのだから、自分の道を進んでほしい。

尚、選挙者の多いこのころ、また雪のため交通の便が悪くとも、無遅刻無欠課を守った皆勤賞の受賞者は、次の十一名である。

三A　秋元利昭
三C　松嶋昌朗
三D　浅野朋子
三E　伊藤和聡
三F　九鴉和郎　長岡幸夫　庄内俊憲　藤田伸也　戎厳敏希
三G　若狭　誠　畠山美雪

卒業式々順

一、修礼
一、開式の辞
一、「君が代」
一、卒業証書授与
一、賞状授与
一、式辞
一、祝辞
一、送辞
一、答辞
一、唱歌「蛍の光」
一、校歌
一、閉式の辞
一、修礼

生徒会多難の一年

補正予算組む

私立への希望者増す

今年の進路希望の状況を十二月三十一日のもので見ると、進学希望者が三百四人、就職希望者が一十人となっている。就職先は、県内が十一名、県外が九名となっている。

第一次志望校をみると、国・公立が七十九名、私立が一百四名、短大七名、各種学校等が十四名となっている。これは昨年にくらべそう変化はないが、私立大学三十名ほど増えている。国立一期校志望者は四十八名で、東北大五名、岩手大十名、北大と新潟大が七名となっている。

現在の各校状況は、推薦入学が多いが、難関といわれる大学への入学がめざっている。

全般的には私大へののびがめだっている。四人に三人は合格するといわれているが、希望の大学への入学は、依然としてむずかしく激烈なことはいうまでもなく変わらない。国大をはじめ、大部分の大学は試験がこれからである。受験生にとってはまだまだ春は遠いといえよう。

大雪で休校す

今年は、例年になく豪雪のため交通情況がマヒし、一月一日と二月一日・十六日の三日間が休校となった。生徒が学校に来てからそれが休校したため休みには影響がないそうだが、我々が学校に着く前にしらせてもらえなかったものだろうか。学校まで来てから休校と言われており逐一よりも、駅にでも電話をかけてくれるくらいのことがあってもよさそうである。（でも一部にはあったそうだが）この大雪、まだまだ消えそうでない。

JRCだより

昨年の今頃、本校で県北地区の補導者による「青少年赤十字研究会」が持たれ、小・中・高の各先生方が集まった。

会場の真中には団旗を、両端には赤十字は人道のかけ橋〉〈健康と奉仕と親善〉のモットーを掲げて、その下で活発な実践発表や話し合いが行なわれたのだった。

また、最近の激動する社会にあっては、価値観も多様化し、「真実は何か」を見つけることは極めてむずかしいことであります。

しかし、これまでに学びつちかわれた知恵をもって障害を乗り越え、たゆむことなく進んで行こうというのであります。

教育の目的が「人間形成にあるとしたら、そのためにまた一貫教育が大事であるならば、青少年赤十字（J・R・C）活動は大切であり、こうした小・中・高の先生方の話し合う場を設けたことは有意義であり楽しいことでもあった。

能代高校の実践をふり返ってみると次のようなものがあった。能代山本地区に第一回の〝愛の音楽祭〟を企画し実行し多くの賛同を得た事、初めての試みをあなた方の先輩が汗水流して駆け廻って成功させた。また献血運動は率先して協力、たとえば能高祭には独自に実施、献血車に来て貰ったり、急病人の際にも活躍する等、そのため秋父宮妃殿下を迎えての全国献血大会に表彰された先輩もいる。その他アルバム交換には学校の紹介と同時に、秋田の風物等を英文タイプを習いながら書き上げてインドの高校に送ったりした。磨き回収では学校周囲の奥さん達が待ってくれるようになった。なお二日奉仕で身障児童と遊んだり、文集「礎（いしずえ）」も作成し、第三巻までになっている。

しかし以上は過去形なのだ。皆さんの新しい力によってどうかこれらの活動を進行形にして未来へ繋げてほしい。縁の下の力持ちになるつもりで地道にはっきりと活動していって貰いたいと願う。

皆さんにとってはかけがえのない人生の営みとなるものです。お互いが自分自身の生き方に責任をもち、相手の立場をよく理解し、尊重することによって、明るい社会を築いていきたいものであります。

さらには、多数の人々が、それぞれ自分の道をたいせつにし、明るく、豊かな社会を築くため、日夜営々と努力しているこに思いをいたし、すぐれた社会の一員となるように期待します。

皆さんの今後のご多幸と健康を祈って、お祝いのことばといたします。

昭和四十九年三月一日
秋田県教育委員会

祝辞

例年にない豪雪の中にも、春の訪れを感じさせてくれる今日、高等学校の学業を終えられる皆さんに、心からお祝いを申しあげます。

皆さんは、多くの方々の暖かい愛情と指導のもとにりっぱに成長され、今、深い感謝の気持ちと輝かしい希望をもって、新しい世界に向かおうとしております。

皆さんが高い理想をかかげて、この門出は、さまざまの可能性をもつ将来性豊かなものでありますが、その道程は決してやたんなものばかりではなく、途上でさ折しそうな思いにかられることも多いかと思われます。

しかし、これまでに学びつちかわれた深い知恵をもって、今後とも学び、たゆむことなく進んで行こうというのであります。

皆さんの門出は、さまざまの可能性をもつ将来性豊かなものでありますが、その道程は決してやたんなものばかりではなく、途上でさ折しそうな思いにかられることも多いかと思われます。

ほんとうに自分が正しいと信じ、そこに生きがいを見いだすことは、たとえそれがじみで、人目につかないものであっても、たいせつなことであります。

昭和四十九年三月一日
秋田県教育委員会

三点

▼今年度一年間いろいろな事件が発生し、また、マスコミによって報道されてきた。公害問題に始まり、インフレ、物価高を経て、ケリラ、爆弾事件と、毎日、ニュースとして報道されてきたわけである。

▼たとえば、物不足ということで、一般の人が買いだめをやったわけである。そのため非常な物価高をまねいたわけである。ところがこの物価高、マスコミが火を付けたと言えないだろうか。石油がなくなるとか、紙不足だとか、砂糖が不足になるとか、大さわぎした、というより、おどろかされた感じである。結局のところ、生活に非常に影響を及ぼしたものはなかったのである。おかげで商社は大もうけができたようであるが、我々にとっては、なんにもならなかったわけである。値上がりした商品は、眞下がりすることもなく店頭に並べられている。政治が悪いと言ってしまえばそれまでであるが、しかしそれはともかく、マスコミの方に文句を言いたい。

▼このごろ、爆弾事件が問題になってきている。ところでこの事件にかぎらず、似たような事件は、かならずといっていいほど、いたずら電話などがつきものである。なぜこのようないたずらをするのかは理解しかねるが、これもマスコミに問題があるような気がする。

▼現在は、マスコミがなければ世の中が成り立っていかない。しかし、成り立たないといっても、それにおどろされていては、なにもならない。たしかに物価の高騰は、我々や商社のせいかもしれない。しかし、たとえう言っても、すましている、マスコミとは違うとしなくなる。マスコミとは何か、もう一度考えてみる必要がある。